

クリスチャン・プロフェッショナル・リタイアメント・コミュニティにおけるライフスタイル

野村 祥平*

1. はじめに

筆者は2005年11月20日から12月3日までの2週間、アメリカ合衆国のカリフォルニア州にある、ピルグリム・プレイス (Pilgrim Place) というリタイアメント・コミュニティにて実習を行う機会を得た。リタイアメント・コミュニティというシステムそのものがわが国においてはあまり馴染みがないだけでなく、ピルグリム・プレイスはクリスチャン・プロフェッショナル・リタイアメント・コミュニティ (Christian Professional Retirement Community) と呼ばれる、アメリカ合衆国の中でも非常に特殊なリタイアメント・コミュニティである。

わずか2週間という短期間であったが、そのコミュニティのシステムとそこに暮らす高齢者達のライフスタイルは、今まで高齢者分野のソーシャルワーカーとして従事してきた筆者にとって一つのカルチャーショックであり、今後、我が国の高齢者のライフスタイルを考える上で、重要な示唆が与えられるように思われた。そこで、本稿ではこの2週間の経験とそれを記したフィールドノート、またそこで得られた様々な資料をもとに、ピルグリム・プレイスのシステムについて報告したい。

近年、わが国においても高齢者の価値観が多様化しており、欧米諸国のように自らの手で老年期のライフスタイルを選択するという時代になりつつある。わが国の平均寿命は世界の中で最も高く、少子高齢化による高齢者人口の増大はとどまるところを知らない。今後、高齢者がどれだけ自らが満足する、いわゆる生活の質 (quality life ; 以下 QOL) が高いライフスタイルを選択していくことができるかは、社会全般の非常に大きな課題になっていくものと思われる。

当然のことながら、わが国とアメリカ合衆国では社会の構造そのものが異なっているため、単純な比較は困難である。また、そもそもQOLは非常に漠然とした概念であるだけでなく (古谷野, 2004), 本稿自体が現在研究されているQOLに関するなんらかの指標に基づいた客観的なデータを用いたものではないため、このコミュニティのシステムがすなわちQOLの高いライフスタイルをもたらすものであるとは言えない。しかし、この特殊なシステムを考察することは、今後高齢者分野のソーシャルワーカーの援助、特にマクロ・メゾ領域の援助を考える上で一つの例になるという点において、意義があるものと思われる。

* Nomura, Shohei

ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科
社会福祉学専攻 博士前期課程在学

2. コンティニューイング・ケア・リタイアメントコミュニティ(Continuing Care Retirement Community)

ピルグリム・プレイスは、リタイアメント・コミュニティと呼ばれる高齢者の入所施設である。まずは、わが国においてあまり馴染みのないリタイアメント・コミュニティについての概要を述べたい。

民間ベースでのサービスが主体のアメリカ合衆国における高齢者の入所サービスは、規模・機能・運営主体など非常に多岐にわたっており、厳密な分類は困難である。入所サービスの中でも、ピルグリム・プレイスはコンティニューイング・ケア・リタイアメント・コミュニティ(Continuing Care Retirement Community; 以下CCRC)と分類される居住コミュニティである。

CCRCとは、全米高齢者住宅協会(American Association of Homes and Services for the Aging; 以下AAHSA)によると、「他の高齢者サービスとは異なる、進取の気概に富み、自立したライフスタイルを提供する施設であり、一つの場所で居住・サービス・介護などを長期間にわたって提供を受ける契約を結ぶことで、年齢を経るごとに変化する高齢者のニーズを継続的に満たしていく施設」と定義されている(AAHSA, 2006)。

CCRCは、この長期間にわたる継続的なケアを提供するため、インディペンデント・リビング(Independent Living)、アシステッド・リビング(Assisted Living)、スキルド・ナーシングケア(Skilled Nursing Care)の3つの機能を有するものを指す(U.S. Department of Health and Human Services, 1997)。

インディペンデント・リビングは、介護を必要としない高齢者を対象にした住居である。この自立した高齢者のみを対象にした、CCRCではないリタイアメント・コミュニティも多い。

アシステッド・リビングは、24時間の介護は必要とされないが、日常生活において食事・清掃・洗濯・入浴など、軽度の介助が必要とされる高齢者

向けの施設である(和気, 2000)。独立して運営を行う施設もあるが、CCRCの中にある事が多い。

スキルド・ナーシングケアは、重度の介護と医療ケアを必要とする高齢者向けの施設であるナーシング・ホームが中心となっている。現在、アメリカ合衆国の公的な医療保障であるメディケイド(Medicaid)とメディケア(Medicare)1)の償還が認められているナーシング・ホームは医師の往診を含めた広範囲な医療、24時間の看護・介護、リハビリテーション、社会的サービスが提供される高度看護ケア施設(Skilled Nursing Facilities)、高度看護ケア施設よりも緩和されたレベルの長期ケアを提供する中間的ケア施設(Intermediate Care Facilities)の2種類がある(和気, 2000)。

CCRCは、これらの機能を一カ所に集約したコミュニティであり、広大な敷地の中においてこれらの機能を全て提供することで、入居者は年齢・健康状況等に応じて継続したサービスを受ける事ができる。

運営形態としては、一定の経済力のある高齢者を対象として、安全性や娯楽性を謳って民間企業が開発しているものもある(和気, 2000)。しかし、基本的には中産階層のために非営利団体(Not-for-Profit Organizations)が運営しているものが多く、2006年のAAHSAの統計によると、認可されたCCRCは全米で2240カ所あり、そのうち4分の3が非営利団体となっている(AAHSA, 2006)。

3. ピルグリム・プレイスの生活環境 地域特性と社会資源

(1) ピルグリム・プレイスの概要

Pilgrim Placeは、アメリカ合衆国の西海岸、カリフォルニア州ロサンゼルスより西に30マイルほどのクレアモント(Claremont)に位置する。クレアモントは人口約3万6千人、“San Gabriel Mountains”と呼ばれる美しい山の麓にある自然豊かな場所であり、“Claremont Colleges”と呼ばれる7つの大学を中心とした、閑静な大学の町である。住民の多くは中産階層であり、治安も良好

である。

町の中心地である大学周辺からさほど離れていない、クレアモントのメインストリートから一つ路地を挟んだ、豊かな木々に囲まれた閑静な住宅地の中にピルグリム・プレイスは位置する。

ピルグリム・プレイスがこの地に設立されたのは1915年である。キリスト教の教派の一つである“United Church of Christ”(以下UCC)が、海外で宣教をしていた宣教師のために設立した、“Claremont Missionary Home”が始まりである。現在は、UCCの直接的な運営ではなく、非営利団体(Not-for-Profit Organizations)としての運営がなされている(Pilgrim Place, 2005)。

キャンパスの広さは約1.2km²、約330人が生活している。暮盤の目のような街路に囲まれた、長方形の1ブロックのほぼ全体がキャンパスになっている。入り口にゲートはなく、また、外のコミュニティと隔絶するフェンスもない。街路に面して、インディペンデント・リビングの一戸建住宅が立ち並んでいるため、一見するとそこがリタイアメント・コミュニティであるとは想像できない。

内部は、185戸のインディペンデント・リビングの一戸建て住宅(アパートメント1棟)、“Pitzer Lodge”²⁾という名称のアシステッド・リビングのケア付き住宅、“Health Service Center”と呼ばれるナースング・ホーム、ダイニングルーム、フィットネスセンター、エクササイズセンター、アクティビティセンター、視聴覚ホール、図書館、ゲストルーム、Arts & Craftsビルディング、ランドリー、博物館など、様々な社会資源で構成されている。(図1)

(2) インディペンデント・リビング

インディペンデント・リビングのレジデント(residents:入居者)³⁾の生活は多忙である。ほとんどのレジデントは、後述するようにピルグリム・プレイスの内外で積極的な活動を行っているため、自分のスケジュールの中で自由に、そしてアクティブに生活している。

日常生活の中でレジデントが顔を揃えるのは

昼食時である。昼食時になると、特別な予定がない限りほとんどのレジデントがダイニングルームに集まる。平均すると100人を超えるレジデントと一緒に昼食を楽しむ。このダイニングルームでの昼食は、単に食事をするだけではなく、レジデントの社交の場であり、インフォメーション共有の場でもある。通常7人から8人で一つのテーブルを囲むが、席は指定となっており、その組み合わせは毎日変更する。このため、毎回異なるレジデントとテーブルを囲むこととなり、レジデント同士の親密性が高まるようになっている。

また、レジデント同士で共有すべきインフォメーションは、食事が半ばを過ぎた頃、インフォメーションの場が設けられる。レジデントは正面に備え付けられたマイクの前に並び、アクティビティの案内、ゲストの紹介などのインフォメーションを伝達する。この他にも、レジデントの作るニュースレター、掲示板、ビデオなど様々な手段でインフォメーションの共有がなされている。

基本的に、インディペンデント・リビングのレジデントに対するサービスは昼の食事のみである。しかし、例えば独居の場合、食事のデリバリーや、ハウスキーピング、庭の手入れなどのサービスを受けることも可能である。

(3) Pitzer Lodge

アシステッド・リビングのレジデントは、Pitzer Lodgeと呼ばれるケア付住宅にて生活している。ここでは、食事、ハウスキーピング、健康指導、入浴介助などのサービスが提供され、食事は3食ともPitzer Lodgeのダイニングルームで提供されている。メンバーの多くは何らかの介助が必要であるため、インディペンデント・リビングのメンバーほどの活動はしていない。しかし、例えばコンサートやパーティなどのアクティビティには参加する者も多く、中にはインディペンデント・リビングのメンバーと共に外部のコミュニティでの活動に参加するレジデントもいる。

スタッフは2人の看護師(Licensed Clinical Nurse:以下LCN)を中心にケアワーカー

(Certified Nurse Assistant : 以下CNA)が配置されており、CNAによる24時間の当直体制もある。

(4) Health Service Center

ナーシング・ホームは、“Health Service Center”(以下HSC)という名称で呼ばれている。前述の高度看護ケア施設に分類される施設であり、24時間の看護・介護が必要な者へのケアを提供している。HSCは、寝たきりの高齢者や認知症高齢者へのケアだけでなく、ホスピスとしての機能も有している。スタッフは、LCNを中心に、CNA、ソーシャルワーカー、リハビリスタッフ、事務スタッフで構成されている。医療・看護・介護のサービスのみでなくリハビリテーション、グループワーク、ソーシャルワーカーによるソーシャルサービスに関する相談なども行われている。また、外部からのボランティアも積極的に受け入れている。

HSCの役割は、要介護状態になったレジデントにケアを提供する場だけではなく、クリニックとして、医療を提供する場でもある。また、HSCへの入所は、ピルグリム・プレイスのレジデントでなくても可能である。現在、68ベッドを有するが、そのうち60%のベッドにはレジデント以外の地域住民が入所しており、地域のナーシング・ホームとしての役割も担っている。それ故、HSCはピルグリム・プレイスの中で一種独立した存在となっている。

4. クリスマン・プロフェッショナル レジデントの特性

ピルグリム・プレイスのレジデントは、2005年現在、326人のレジデントが暮らしている。その内、119名が男性、207名が女性であり、男女の比率はほぼ1:2となっている(Pilgrim Place, 2005)。この点では、今までの研究結果によって明らかにされている、大部分の高齢専用施設では一般的に男性より女性が多いという特性と類似する(Smithers, 1985)。

しかし、ピルグリム・プレイスには他のリタイアメント・コミュニティや高齢者施設とは異なる特徴がある。それは、レジデント全員がある一定の条件を満たしたクリスマン・プロフェッショナルであるということである。これは、従事していた職業と宗教に同質性があるということの意味している。

クリスマン・プロフェッショナルとは、Pilgrim Placeの入居要件に詳細が説明されている。入居に当たっては、要約すると以下の要件を満たす必要がある(Pilgrim Place, 2005)。

宣教師、牧師、神学を教授していた者、YMCA、YWCA、その他教会関係の様々な職などのクリスマン・プロフェッショナルとして、20年以上にわたりフルタイムで働いた経験がある者

の入居資格を満たす者と20年以上婚姻関係にあるか、生活を共にしていると認められる者。

所属していた教会もしくは組織がキリスト教であり、エキュメニカル(ecumenical: 超教派的)な考えを持っていると認められること。

入居時の年齢が65歳から75歳であること。

入居時に心身共に健康で、自立した日常生活が可能であること。

この基本的な条件を満たした上で、海外で宣教していた者、人種・民族がマイノリティである者、教会における活動がより長い者、UCCの活動に従事していた者などに優先順位が与えられる。

これは、ピルグリム・プレイスがUCCによって、海外で宣教活動をしていた宣教師のためのホームとして設立されたという歴史的背景と、人種・民族に関しては“多様なコミュニティ”を目指すという目的があるためである。現在も、レジデントの半数が海外で宣教をしていた経験があり、その数は45カ国にもものぼる。また、エキュメニカルな信仰に対して理解のあるクリスマン・プロフェッショナルであればメンバーになることができるが、UCCに属するレジデントが50%と非常に多い。(Pilgrim Place, 2005)。

また、大きな特徴として挙げられるのは、資産要件の審査(Means Test)がないという点である。AAHSA の 1991 年の調査では、1988 年から 1991 年までに開設された CCRC の約 7 割が利用料の 1.5 ~ 2.0 倍の月収あることを入所要件にしており、またその他の CCRC でも何らかの収入もしくは資産の審査がある(U.S. Department of Health and Human Services, 1997)。

このように、ピルグリム・プレイスにおいては、人種や民族、教派、資産などにとらわれることなく、クリスチャン・プロフェッショナルとしての経験を持ち、エキューメニカルな信仰とアクティブなライフスタイルを楽しみ、かつそのコミュニティを自らの手で運営することに対し強い希望を持つ者であればレジデントになることが可能である。人種差別や教派の対立はない。このレジデントの特性が、後述する様々なシステムが成り立つ大きな要因になっている。

5 . レジデントの自治により成り立つシステム

(1) レジデントの自治による運営システム

レジデントの生活は、タウンミーティング (Resident Town Meeting) と呼ばれる自治組織を中心としたシステムで運営されている。タウンミーティングにはレジデント全員が加入している。その中に “ Committees ” と呼ばれる 26 種類の委員会があり、クリスチャンとしての宗教的な活動、ゲストルームなどの施設の管理、後述する “ Residents Health Support Program ” の管理、最大行事である “ Annual Festival ” の企画・運営、ニュースレターの発行など、レジデントの生活に必要な事柄を運営する。これらの委員会は、全てメンバー自身の手によって運営されている。また、このほかにも、自主的に運営される様々なグループがある。

また、ピルグリム・プレイスは、 “ Pilgrim Place Corporation ” という名称の非営利団体であるため、理事会 (Board) が最高決定機関である。これ

は、外部の有識者やタウンミーティングの代表者が理事となって、運営・経営方針を決定する機関である。

この理事会によって決定された運営・経営方針に従い、利用料の管理、寄付やファイナンスなどの資産管理、スタッフの人事管理などを遂行するのが CEO を中心としたマネジメントチームである。マネジメントチームはレジデントではなく、全員が雇用されたスタッフである。このチームの下、HSC や Pitzer Lodge の専門職、ダイニングルームのスタッフ、環境整備のスタッフなど、多くの者が雇用されている。

このように複雑な運営がなされているが、基本的にはレジデントの力が非常に強い。CEO の任命権を持つ最高決定機関である理事会は、20 名のうち 4 名がタウンミーティングの代表者であるため、レジデントが直接経営に参加するシステムになっているからである。また、例えば HSC やダイニングルームなど、雇用されたスタッフが提供するサービスに対しては、サービスごとに “ Advisory Committees ” があり、レジデントの意見が反映される仕組みとなっている。

(2) 多彩なアクティビティ

ピルグリム・プレイスには、「アクティブなライフスタイルを楽しむ」という大きな目的がある (Pilgrim Place, 2005) ため、多彩なアクティビティがある。特にインディペンデント・リビングのメンバーは多くの役割を持ち、内外で様々なアクティビティを自主的に行っている。

これらのアクティビティは、タウンミーティングを中心とする運営を目的としたもの、楽しむことを目的としたものなど多様であり、前述の委員会や自主的なグループ、全く個人的に行われているものなど、数え切れないほどのものが存在する。

音楽、創作活動など、芸術的なアクティビティのほかに、特にピルグリム・プレイスでは “ 老い ” や “ 死 ” など、高齢者が直面する問題に対する神学的な問いを研究するグループ、社会情勢や倫理について研究するグループなどがあり、定期的

ディスカッションの場などを開いている。また、内外で様々なボランティアを行うグループも数多くある。

これらのアクティビティは、ほとんどメンバーが主体的に行っている。レジデントは、神学のみならず芸術にも造詣の深い者が多く、また、レジデントの中で、102人が聖職者、53人が博士の学位を取得しており(Pilgrim Place, 2005)、図書館にはメンバーの出版した書籍が並び、研究、音楽、創作活動などのレベルは非常に高い。レジデントは、あらゆる分野に何かしらの秀でた能力を持っている。それゆえ、健康上の理由などで活動が困難なメンバー以外は、皆自分の持っている能力を生かし、グループの中心となって活動している。

(3) Residents Health Support Program

“Residents Health Support Program”は、経済的な問題で入居料を払えないメンバーをサポートするシステムであり、レジデントはファンドと呼んでいる。ピルグリム・プレイスは営利目的の高所得者向けのリタイアメント・コミュニティではなく、クリスチャン・プロフェッショナルとして、社会に貢献して来た者の引退後の社会サービスである。

レジデントの多くは、公的な退職者年金、個人の資産、民間保険などで利用料を支払っている。しかし、Pilgrim Placeの場合、宣教活動などで海外、特に発展途上国などでその国の社会へ貢献することに自らの持てるもの全てを捧げてきた者もあり、満額の入居料を支払うのが困難なレジデントもいる。こうした不足分をこのファンドでサポートすることによって、経済的要件なしに入居することが可能となっている。

このファンドの最も大きな収入源は、年間の最大行事である“Annual Festival”の収益である。またその他にも、ゲストハウスの収益、様々な寄付などからも成り立っている。

“Annual Festival”は、毎年11月に開催される。レジデントは、芸術作品やリサイクル品の販売、各種教室、コンサートなど、自らの能力を生かし

て収益をあげる。また、そこに外部のコミュニティの住民も多数参加する。開催中は多くの入場者で溢れ、クレアモントの代表的な行事の一つとなっている。

また、これ以外にも多くの寄付が集まる。その多くはレジデントのアクティビティで得た収入である。これは、自ら生産した果物を売るグループ、リサイクル品を販売するグループ、雑貨を売るグループなど、前述のファンドを運営する委員会と連携して日常的に活動しているグループもあるが、例えば、自分で描いた絵葉書売って得た収益をファンドに寄付するなど個人で活動している者もいる。

このように、このファンド・システムは、レジデントが自分の能力を生かし、そこで得た収入を個人のためではなく、他のメンバーのために役立てることで成り立つシステムである。このように、アクティビティを楽しみながら得たファンドの収入は非常に大きな比重を占めている。

(4) 社会への参加

ピルグリム・プレイスにおける、アクティビティは社会貢献を目的としたものが多い。ファンドを支えるアクティビティはもちろんのこと、その他にも様々なボランティアグループがある。例えば、HSCの受付は、ボランティアグループによってなされている。また、個人的に介助が必要な他のメンバーのハウスキーピングをするボランティアを行っている者もいる。また、全てのアクティビティが楽しむことその他に何らかの社会貢献を目的としている。

これらは、ピルグリム・プレイスの生活をお互いに支え合うアクティビティであるが、外部のコミュニティにおいてもメンバーたちは積極的な活動をしている。レジデントの多くは、第一線を退いたとはいえ、聖職者として地域の教会に深く関わっている。クリスチャンの多い同地域において、教会に深くかかわるということは、地域の人々との交流を保つことを意味する。その他にも、大学や神学校での神学を講義する者、パイプオルガン

の奏者として演奏活動を行う者など、それぞれの能力を生かしたアクティビティを行うレジデントが多い。

また、病院や施設などでのカウンセリング、フードバンクやハウジングサービス⁴⁾におけるボランティアなど、直接的な援助活動を行う者もいる。レジデントの多くは、発展途上国などで宣教師としてその社会に貢献してきた者であり、また、教会関係のエージェンシーでソーシャルワーカーやカウンセラーなど対人援助専門職としての経験を持つ者もいる。

ピルグリム・プレイスの位置するクレアモントは、カリフォルニア州の中でも、メキシコ国境に近い地域であり、大都市であるロサンゼルス近郊でもある。実際に、筆者がレジデントと共にボランティア活動に参加した数キロ離れた隣町にあるフードバンクでは、生活に困窮した人々が食料を求め長蛇の列を成すだけでなく、その貧困問題のベースにはドラッグ、アルコール依存症、人種差別等、様々な社会問題が複雑に絡み合っていた。

また、筆者も同行した病院でのカウンセリング活動では、ターミナル期の高齢者や病を得た者にとって、スピリチュアルなケアの持つ意義の深さを知った。筆者の参加した活動はごく僅かであったが、それだけでも社会の中に多くのニーズがあることが判明した。

このようなニーズに対する援助活動は、特にアメリカ合衆国の場合、専門職による援助だけでなく、多くの住民ボランティアによって支えられている。これらの活動にはピルグリム・プレイスのレジデント以外の地域住民も参加しており、それらの者と共同して、レジデントの多くは自らの専門性を生かし、積極的に社会全体に貢献しているのである。

5. まとめ

高齢期は一般的に、様々な役割を喪失する過程であると言われている。近年、自立と社会参加という言葉は、高齢者の諸問題を論じる上で必ず登

場する言葉であるといっても過言ではないだろう。自立の概念を整理すると、経済的自立、身体的自立、精神的自立がある。辞書的には自己以外の者の助けを受けることなく、自己の意志によって決定し、行動することを自立としている(菊池, 1998)。

しかし、現在の社会福祉における自立とは単にそれだけを意味しない。自立と相反する概念である依存を前提とした自立、サービスの利用や経済的な援助を受けながらも、精神的な自立、すなわちその真髄である自分のライフスタイルは自分で決めるという自己決定の原理が満たされている状況が自立とであり、また、高齢者の社会参加も同様に高齢者が自発的に選択した社会参加こそ、その自立を助長するものであるとされている(藤崎, 1998)。

このような観点からすると、ピルグリム・プレイスのシステムとレジデントのライフスタイルは、改めて高齢者の“自立”や“社会参加”とは何かという根源的なことを、深く我々に考えさせられるものではなかろうか。

ピルグリム・プレイスでは、各々のレジデントが主体となって様々なアクティビティを楽しんでいる。加えて、それらのアクティビティが自分のためのみではなく、他のレジデントのため、ひいては社会に貢献するためのものとなっている。例えば、自ら楽しんで創作した作品の収益は、ファンドとして他のレジデントのために活用される。あるいは、フードバンクやハウジングサービスにおけるボランティアは直接的に社会に貢献している。レジデントは、そのようなライフスタイルに価値を見出し、深い意味を模索しながらコミュニティとしてのピルグリム・プレイスのシステムを自らの手で創造しているのである。

このようなライフスタイルを楽しむ一方、やはり“役割の喪失”や“対象の喪失”というような老年期特有の問題に対するレジデントの悩みは深い。しかし、これらの悩みに対し、レジデントは“老い”や“死”について日常の全ての生活の中で神学的・哲学的な答えを模索し、そして受け入れ

ながら社会に貢献する事の意味を見出そうとしている。

幸福で生きがいに満ちた老年期を迎えると言う、いわゆるサクセスフル・エイジングは万人の願いであり、高齢者福祉の究極の目的である(古谷野, 2003)。この、“幸福で生きがいに満ちた老年期”というものは、非常に主観的な要素に影響される概念であるため、個人によって異なるであろう。

しかし、ピルグリム・プレイスのレジデントのように、“古い”という現実の中で、自らのライフスタイルを深く模索してその価値を見出し、かつ、それを自らの手で選択し楽しみながら他者のために生きるという愛他的な姿は、幸福で生きがいに満ちた老年期の一つの姿とはいえないであろうか。そして、それを可能にしているピルグリム・プレイスのシステムは、今後わが国の高齢者福祉を考える際、文化的土壌に適合させた上で、一つのモデルとなる可能性があると思われる。

6. 終わりに

ピルグリム・プレイスという魅力的なリタイアメント・コミュニティでの経験の中で得たものはあまりにも多く、また、その根底にある意味は深い。このようなシステムを可能にしているのは、レジデントの特性によるところが大きいであろう。レジデント達は、クリスチャン・プロフェッショナルとして多くの経験を積み、様々な分野に秀でた人々である。それに加え、クリスチャン・プロフェッショナルの中でも、内外を問わず社会に貢献することに全てを奉げてきた者が多く、またエキュメニカルな信仰とそのアクティブで愛他主義的なライフスタイルに強く賛同した人々でもある。このような事実に加え、社会のシステムそのものが異なるわが国において、今後どのようにしてこの経験を消化し、実践に結びつけるかということが筆者に課せられた大きな課題であろう。

末筆ながら、本実習を調整してくださり、滞在中も公私にわたりお世話になったKenneth. J. Dale先生、また、ピルグリム・プレイスの方々に深く

感謝を捧げたい⁵⁾。

注

- (1) メディケアは社会保障法第18章に規定されている、高齢者や障害者を対象とした医療保険制度で、ほぼ強制加入となっている。メディケアは同法19章に規定された、低所得者への医療扶助であり、州毎に独自の運営がされている。カリフォルニア州ではメディカル(Medi-Cal)という名称で呼ばれている。
- (2) “Pitzer”は“Russell K. Pitzer”(1878-1978)の名前に由来している。Claremont Collegesの一つにもPitzer Collegeがある等、教育・福祉に多くの寄付をして地域に貢献した。
- (3) Pilgrim Placeでは、パンフレットなどにおいて入居者を“residents”と呼称している為、本稿ではあえて入居者とせず、レジデントと表記した。また、日常生活では入居者の事を表現する時に、“Pilgrims”または“Pilgrim Friends”と呼ぶ事が多い。
- (4) ここでのフードバンク(Food Bank)とは、クレアモントの隣町、ポモナ(Pomona)の教会における活動である。フードバンクは、“America’s Second Harvest”が運営する食糧供給ネットワークである。野宿生活者など食糧を得ることが難しい者に、無償で食糧を供給する活動をしている。全米中にネットワークがあり、各地域で様々な団体が加盟して活動をしている。Pilgrim Placeでは、毎週火曜日と木曜日の午後、グループで教会に出向き活動している。フードバンクについての詳細は、“America’s Second Harvest”のホームページ、<http://www.secondharvest.org/>を参照されたい。また、ここで述べたハウジングサービスは、全世界にネットワークを持つ“Habitat for Humanity”が運営する住宅供給事業で、ボランティアの手によって住宅を建て、低所得者に提供する事業を行っている。Pilgrim Placeでは、毎週土曜日に男性のレジデントが参加している。このサービスの詳細に関しては、<http://www.habitat.org/>を参照されたい。
- (5) 本稿では、Pilgrim Placeというリタイアメント・コミュニティの実名を記載した。本稿の中のPilgrim Placeに関する全ての固有名詞は、電子メールによって、本稿に記載することに対する承諾を頂いている。

引用文献

- American Association of Homes and Services for the Aging (2006) CCRC (<http://www.aahsa.org/ad-vocacy/ccrc/default.asp>, 2006.8.31.)
- American Association of Homes and Services for the Aging (2006) Aging Services in America: The Facts, (http://www.aahsa.org/aging_services/default.asp, 2006.8.31.)
- 藤崎宏子 (1998) 『高齢者・家族・社会的ネットワーク』 培風館
- 菊池幸子 (1998) 『自立』, 京極監修 『現代福祉学レキシコン』
- 古谷野巨 (2003) 『第・章 サクセスフル ・エイジング』 『新社会老年学 - シニアライフのゆくえ』
- 古谷野巨 (2004) 『社会老年学における QOL 研究の現状と課題』 『保健医療科学』 53 (3), 204-208。
- Pilgrim Place (2005) Fiction or Fact about Pilgrim Place
- Pilgrim Place (2005) General Information
- Pilgrim Place (2005) Progress Fall 2005
- Smithers-Janice A. (1985) Determined Survivors; Community Life among the Urban Elderly, Rutgers University Press (=1988 吉井弘訳 『都市に生きる高齢者たち』 芦書房), p40。
- U.S. Department of Health and Human Services (1997) Continuing Care Retirement Communities: A Background and Summary of Current Issues
- 和気純子 (2000) 『高齢者の福祉 (1) - 高齢者福祉計画と高齢者福祉サービス』 仲村, 一番ヶ瀬編 『世界の社会福祉 - アメリカ・カナダ』 旬報社, 171-182